

景観の福祉効果

2年前、私は、3月間という長期間、都内の病院に入院していた。退院の目途がつかず、イライラした。また、特にすることもなく退屈する日が多かった。

そんなとき6階にあったデイルームから東京タワーを眺めるのが好きだった。日中の東京タワーは、下界に足早に歩く人や走行する無数の自動車を悠然と見下ろす。「どうしてそのように忙しく動きまわるのか」と見ているようだ。

帳の下りた夜の東京タワーがより好きだった。汚れた大都会の姿が消え、暗闇の中にライトアップされた東京タワーが卒然と表わす。孤高で美しい。

普段は、橙色に光彩を放つ東京タワーは、イベントの時に変化する。乳がんの日にはピンク色に、花見の時期は、艶やかな桜色に変わる。こんな時の東京タワーは、急に饒舌になる。

近年、東京タワーは、外国人観光客に人気がある。世界的に美しさが認められたからだ。病院から見ていた東京タワーは、美しいだけでなく、様々なメッセージを与えてくれた。

私は、東京タワーによって励まされた。病気の回復にも効果があったと実感している。もし、病院から東京タワーが見られなければ、病気の経過は違ったものになったに違いない。

福祉の世界では、景観という観点は、ほとんど取り上げられていない。しかし、患者、高齢者、障がい者などハンディキャップを有している人は、周囲の環境によって大きな影響を受ける。美しい景観を見れば、私と同様に元気が出てくるに違いない。癒しの効果も大きい。

私の祖母が入居していた富山県の介護施設では、天気の良い日は、部屋から遠くに夏でも雪を抱いた立山連峰が見えた。太陽の光を反射する山並みは、富山に生まれた人にとって何物にも代えがたい存在だ。祖母は、それが楽しみで「美しいね」と言いながら、少女時代の思い出話を語るのが常だった。その時の祖母は輝いていた。幸せな時間だったのだろう。

最近、ビルの中にある保育所が、都市部に多い。園庭がなく、狭い窓からは隣のビルの壁しか見えない。こんな保育所で日中過ごす園児の生育が心配になる。反対に周りに四季に変化する豊かな自然があれば、園児の情緒にも好影響を与えるだろう。

私の入院生活の経験から福祉分野でもっと景観の効果を重視すべきだと思う。